



Title	ピア・サポートにできること
Author(s)	渡邊, 誠
Description	7. ピア・サポートにできること
Relation	北海道大学ピア・サポート活動報告書（平成22年度版） pp. 95-96
Issue Date	2011-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45771
Type	report
File Information	Watanabe.pdf



7. ピア・サポートにできること

7. ピア・サポートにできること

渡邊 誠¹

学生相談に関わる仕事をしていると、利用してくれる学生達から、非常に多様な話を聞くことになる。簡単な問い合わせに類するものから、その人の一生や生死に関わるものまで、本当に様々である。利用する人も様々で、学生生活を送り学業を続けるのに非常な困難を抱えている人もいれば、学業やサークル活動や研究などで、目覚ましい活躍をしている人もいる。控え目に学生生活を送ってゆく人も、もちろんいる。困難を抱えている人が、やがて目を見張るような成果を上げるようになることもある。本当の話である。

どのような内容であれ、どのような人であれ、相談機関を利用してもらえるのはありがたい。些細と思える問い合わせや相談も、私は嬉しい。本当に困った時に来てもらえるかもしれないからである。友達に、あそこに行けばちゃんと話を聞いてくれるよ、悪くないよ、と勧めてくれるかも知れない。そんな、まあ言ってみれば、ほとんど下心に近いような気持ちも湧いて、喜んで話を聞く。

とはいえ、支援の必要な人、あるいは支援があれば役に立つ人のうち、学生相談室などの援助機関を利用してくれる人は、やはり限られている。最も深刻な問題を抱えた人が、学内の公的な援助機関をあまり利用しないというのは、多くの大学に共通している傾向だ。「先生」と名のつく人のところに「相談」に行くということの、敷居の高さは否めない。学生相談の仕事をしているからなのかどうか、私は学生に対して、立場は違ってもこの多忙で負荷が大きくなってしまった大学というものの中で、共に学び生き抜いてゆこうとする者同士という感覚を、いつしか持つようになった。それでも駄目なのである。多分、相談の時は、相談用の顔がある。授業用の顔、教師向けの顔があるように。そしておそらく、教師や相談員の側にも、学生向けの顔というものがある。知らず知らずのうちに、そうなっているのであろう。胸襟を開いてもらうのは、そう簡単なお話ではない。もちろん、胸襟を開くのが、本人の役に立つとしての話だが。

しかし、学生同士なら、同じ立場の者同士なら、ずいぶんと違うのではないか。ぐっと敷居が低くなるのではないか。まずは、そういう素朴な期待が、ピア・サポートに対してはある。授業の時の顔と、友達同士の時の顔は、全然違うじゃないか。そんな思いもある。けれども、そういう比較的簡単な次元の話ばかりではない。同じ立場の人間の話や振る舞いは、そうではない場合よりも真剣に受けとめられるものだ、と思う。グループ・カウンセリングに、リーダーとして、あるいはメンバーとして参加してみても、そう実感する。同じ立場の者同士の関わりは、他に換え難い。まだ心理学専攻の学部生

¹ 北海道大学大学院 教育学研究院 准教授

だった頃、私は、精神的な問題を抱える思春期の少女に勉強を教えるかたわら、話し相手にもなる、という機会を得た。それは、私にとって実質上初めての、公的な支援体験だった。そして、その関わりの報告を聞いた指導教官から、同じように悩んでいる人がいると思って、相手はほっとしたんじゃないですか、と言われたのをよく憶えている。これは多分、今の私にはできない。

ピア・サポートには、他の可能性もある。北大ピア・サポートは「つなぐ」機能を目指している。学内の様々な支援機関を、学生同士を。私はこれは、コミュニティづくりということではないかと思う。三十年前、北大生であった私は、「ここは空気が薄い」と感じていた。人と人との関わりが希薄なのである。それは、今に続いてはいないだろうか。そういった「学風」と呼ばれるものに、長期的な視点から影響を与えてゆくということでもある。これは、他大学でも試みられている。

むろんピア・サポート活動には、多くの課題もある。ピア・サポーターの意欲を保ち、集団としての士気を維持することの困難さは、多くの大学の経験が教えるところである。これは、おそらくあらゆる集団活動にとって、古くて新しい問題なのであろう。集団の成立条件がすなわち集団の硬直化と停滞の要因でもあって、特に対処をしない限り衰退は避けがたい、とする説もある。初期の熱気、ないしはその余韻が去った時、どうしてゆくか。また、成員が次々と入れ替わってゆくタイプの集団ならではの問題もある。長年継ぎ足してゆく「秘伝のタレ」、のような集団活動は可能だろうか。また、その中で、長期に渡って関わり続ける教員の役割は何か。

私は、これらの問いに答えを出せる段階にない。まだまだ遠いのではないか。実践を続けながら、そして、ピア・サポート活動を行っている大学同士でつながりながら、考えてゆけたらと思っている。